地域の底力を信じ、市民一人一人をローカルヒーローに!

ながののNPOと市民をつなぐ機関誌

まんまる

特集 「有害鳥獣は、減らせばいいの？」

●まんまるニュース
● My ストーリー　NPO 法人まめってぇ鬼無里　事務局長　吉田廣子さん
●旬 NPO 紹介　NPO 法人小田切エルダーフラワープロジェクト
●お宝ざくざく地域を掘り起こせ！　篠ノ井・大豆島
●まんまるイベントスケジュール

NPO 法人信州里山プロジェクト　今井さん・宮川さん

大岡森林塾　廣田さん

2021 夏号 №29

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

まんまるは SDGs を推進しています。

特集

有害鳥獣は、減らせばいいの？

「有害鳥獣」とは、人畜や農作物に被害を与える鳥獣のことを言い、令和元年度の全国の鳥獣による農作物被害は158億円に上ります。そのうち約5億円が長野県。他にも、林業被害や市街地での人的被害などが発生しており、その対策が急務となっています。

国では、2023年までにニホンジカ（以下シカ）やイノシシの生息数を半減させることを目標に掲げて、その頭数は年々減少しています。しかし、目の前の鳥獣を減らすことだけで課題は解決するのでしょうか。

そもそも自然豊かな長野で、人々は長年野生鳥獣と共存してきました。しかし今、私たちが直面する有害鳥獣は、人々の暮らしにも変化をもたらし始めています。私たちが今の暮らしの中で野生鳥獣とともに生きる道を、山と向き合うさまざまな人たちの声から探ります。

巻頭インタビュー

信州野生生物保全センター　事務局長　陸（くが）　斉（ひとし）さん

―信州野生生物保全センターとはどんなところでしょうか？

野生動物による農林業被害対策を効果的に進めるために何をなすべきか、について提言や対策技術の普及をはかるために、2001年に長野県内在住の野生鳥獣問題に関わる有志により発足しました。行政への提案や長野県との協働事業として対策学習ビデオの発刊、現地での対策学習会や、野生生物への理解を深める学習活動などを行ってきました。提案が県内の対策に反映されるなど当初の設置目的が一定程度達成されたため、現在は次のステップへ向けて準備中です。

―長野市街地でもクマやイノシシなどの目撃情報があり、鳥獣害が身近なものになっているように思います。被害を減らすには害獣を減らせばよいのでしょうか？

害獣を駆除しても森が維持されていれば獣は減りません。他にも防護柵や廃果等誘因物除去、藪払いも必要です。駆除は必要ですが、そこに頼りすぎています。担う猟友会会員の高齢化や会員減が深刻ですし、本来、趣味で狩猟を行う人々に依存するのは問題です。最近は地域おこし協力隊をはじめ狩猟免許をとる人も増えています。狩猟免許を所持することや弾薬などの消耗品にもお金がかかることを考えると、このような地域を支える従事者への配慮が必要だと考えています。

―被害対策を専門とする駆除専従者が必要ですか。

必要ですが、駆除だけでなく防除や利活用など総合的な鳥獣対策を進めるための専従者が市町村に必要です。

―見直すのは、国や市町村の制度だけでいいのでしょうか？

森の環境を整え、積極的に森林を活用することも挙げられます。実は、今の日本の森林資源量は過去50年の間に2・8倍！豊富な森林があるのに活用できておらず、資源の有効な活用方法も一緒に考えていくべきだと思います。

―里山が荒れています。それも原因の一つでしょうか？

中山間地から人が離れたことで人間と獣たちとのすみ分けができなくなっています。耕作放棄地が増えて荒れる里山を、一緒に整備、支援する交流人口を増やす。また、長年培われてきた知識や能力を受け継ぎ、その地で暮らす若い世代を増やしていかないと、このままでは日本の風土や文化が失われてしまいます。

―有害鳥獣の問題は地域の伝統や暮らしの存続にもつながるんですね。

目の前の動物のことだけではなく、その地で幸せに暮らすという福祉とも深く関わっているのではないでしょうか。自然の多い地域で暮らしていくための独自のしくみ作りを、みんなで考えることが今必要だと思います。

地域資源としてのジビエ活用と振興を目指す

長野市農林部いのしか対策課
主幹兼補佐　北村俊英さん

平成31年に農業被害や鳥獣捕獲労力の軽減および中山間地活性化のため稼働開始した長野市ジビエ加工センターと、長野市の鳥獣被害対策の状況について北村俊英さんにお話を聞きました。

長野市は、有害鳥獣の捕獲、人との棲み分けのため緩衝帯の設置による防除、里山などの環境整備を中心に行っています。このうち長野市が長期戦略２０４０「ながのジビエ普及促進事業」と紐づけ、力を入れているのは捕獲活動です。それを担っているのは、「長野市鳥獣被害対策実施隊」。猟友会会員や農協組合員などで構成する有害鳥獣対策協議会が推薦しています。

農作物に被害をもたらすシカとイノシシを中心に、ジビエの普及促進に努め、長野市の地域資源としての有効活用を目指しています。飲食店での提供だけでなく、子どもの頃からジビエに親しんでもらうため、食育の一環として学校給食にも取り入れています。「料理の主役としてだけではなく、命の尊さや長野の資源として山の恵みを知ってもらえたら」と北村さんは期待しています。

今後は、高齢化等により減少する実施隊員の育成と、販路が増えた加工品の安定した供給が課題となっています。

中条地区にある市のジビエ加工センター

「狩猟者にとって駆除、捕獲活動は重労働なのでボランティアでは難しい。また、報償金はあっても、生計は成り立たず狩猟免許を手放す人もいる」とAさん。日本中で増加するシカは、２００５年からの10年間で倍増し、２０１４年のピーク時は全国で２４６万頭にまで達しました。シカは植物や樹木を食べて枯らしてしまい、そこに暮らす昆虫や鳥にも影響を及ぼします。樹木が枯れ、山がまる裸になってしまえば、きれいな水が確保できず、土砂崩れなどの災害がおきる危険も高まります。災害による損害、農業や林業に与える影響を考えると、このまま駆除する人が減ることで被害がさらに増えることが危惧されます。

ジビエありきの有害鳥獣対策になっていない？

有害鳥獣駆除従事者の立場から

※ご本人の希望で匿名となっています。ご了承ください。

そのような事態を避けるため、新たに狩猟免許取得者を増やすと同時に、今の狩猟者をプロの有害鳥獣駆除従事者として育てることが重要です。「動物の命を奪うという特殊な仕事であり、誰でもできることではない。その従事者に対して手当は妥当なのか、検討が必要」とのこと。また、２０２１年４月から捕獲補助金の金額が、食肉として使えるかによって変わるようになりました。「まさにジビエありきの制度。ジビエはあくまでも利活用であって目的ではない。有害鳥獣は地方の過疎化、耕作放棄地が増えることが原因であり、こうした環境整備も同時に進めていかないと根本的な解決には至らない」と指摘しました。

命をいただく

ＮＰＯ法人信州里山プロジェクト
理事長　今井勝晴さん
理事　宮川仁司さん

ＮＰＯ法人信州里山プロジェクトは、認定鳥獣捕獲等事業者（※）として県から認定を受けた、狩猟のプロ集団です。近年北信地域にも増加しているシカについて「保護区と呼ばれる狩猟できない区域から出てきたシカが、里を荒らしてまた保護区に帰っていく。こちら撃たれないとわかって動くシカもいる」と、駆除と保護の境界線に頭を悩ませることも多いそうです。

しかし駆除だけでなく、獲った獲物の肉はジビエに、骨や皮までも有効に活用

狩猟体験ツアーで説明をする様子

※認定鳥獣捕獲事業者とは、都道府県知事が認定する、安全かつ効果的に捕獲等をするために必要な技能及び知識をもつ法人のことです。

することで捨てる部分を少なくする努力をしています。今井さんは、「有害鳥獣とはいえ、命。ただ埋葬するのではなく、できるだけ活用したい」と話します。

委託を受け有害鳥獣の駆除を行う一方で、狩猟体験ツアーを開催。若手の育成にも力を入れています。「最近は女性の参加が増えている。それにより全体数が増え、活気も出るのでとてもいいこと」と宮川さん。今までの参加者の中で実際に狩猟免許を取得した人もいて、確実に裾野を広げています。

新規免許取得者を増やすと同時に、「獲物をいかに有効活用できるかは、仕留め方によって変わる。いかにうまく仕留めるか、狩猟のプロを育てることも大事」と話しました。

里山を守る人々

鳥獣に直接向き合う人たちがいる一方で、荒れつつある里山を守り、次世代へつなごうとする動きもあります。

大岡森林塾　廣田忠夫さん

廣田さんは、祖父から引き継いだ林業を営み、ずっと大岡で暮らしてきました。戦後、外国材の輸入やガスの普及により木材が売れなくなり、林業に従事する人が減少する中でも、大岡の山を守り続けています。

「人口減少によって山が荒れ、耕作放棄地が増え、自然と人との共存のバランスが崩れてしまった。これまで守ってきた里山を適正に管理することが動物たちとの共存にもつながる」と廣田さんは言います。

廣田さんは、2014年移住してきた人や次世代の人たちと一緒に大岡森林塾を設立。山に入り、木を伐り、活用する、里山の暮らしを守り受け継ぐ活動をしています。今、日本の木材の値段が上昇していることもあり、若い世代に生業として引き継ぐことができたらと期待しています。

大岡森林塾のまきづくりの様子

里山保全と福祉のつながり

なかちゃんで助け合う

中条地区住民自治協議会　地域福祉ワーカー　黒岩秀美さん

今から18年前、「家の周りの草刈りができなくなった」「土をおこせず畑が荒れてしまう」など地域の「困ったなぁ」という声がきっかけで、住民同士が知恵や力を出し合う仕組み「なかちゃん」が生まれました。なかちゃんの主な活動は、草刈り、大工仕事、畑おこしなどの日常の困りごとの手助け。会員になれば力を借りることができます。なかちゃんに助けてもらうことで、田畑を続けることができ、農地を守ることにもつながっています。

その地で暮らし続けるためのしくみが、里山の荒廃を防ぐ一助にもなっているのではないでしょうか。「ここでずっと暮らしていきたいから、そのために助け合う。できた頃は山の住民のものだったしくみも、今や里でも必要になっている」と黒岩さん。

なかちゃんのような、地域福祉のためにできた既存のしくみにも、鳥獣被害解決の糸口がありそうです。

NPO法人まめってぇ鬼無里　吉田廣子さん

「食」や「林業」「米作り」など、鬼無里の暮らし・文化を知ってもらい、地域に関わってもらうための活動を続けてきた同法人。今年度からは、鬼無里の豊かな資源を活かしながら関係人口・サポーターを増やすため、人づくりの視点で活動を計画しています。

山のあり方を知り、暮らしの中にある技術を引き継ぎながら、子どもも大人も役割をもち、一緒に楽しめる。そんな「自分たちが目指す里山の形」を見せていきたいと吉田さん。高齢化し荒廃する里山を再生するプロジェクトが動き出します。

今回の取材で、自然との共存の手立てはもともと私たちの手にあると確信しました。長い間培ってきた知恵や技術をさまざまな人が受け継ぎ、担うことができたら。昔の生活に戻すことはできなくても、今の私たちにできることはありそうです。里山を守る取り組みに参加する、中山間地との交流、ジビエを食べる…。限られた人たちだけが頑張っても持続可能にはなりません。初夏、信州ならではの美しい山の景色を見ながら自然との向き合い方を考えてみませんか？

まんまる NEWS

令和２年度　ながのまちづくり活動支援事業補助金
活動報告会

「令和2年度ながのまちづくり活動支援事業」で採択された団体の活動報告会が5月20日大豆島公民館で開かれました。住民自治協議会を含む19の市民活動団体から約50人が参加し、1年間の活動内容を持ち時間5分にまとめて発表しました。

「若穂民話の会」は、地域で語りつがれてきた民話を集めた「若穂のみんわ全4集」のうち発刊した第1、2集を披露。いっしょに作成した手作り紙芝居を使っての発表で注目を集めました。発表を終えた小山仁子さんは「良い教材ができあがったので学校や地区行事などで積極的に上演、朗読しています。ただ、今日の発表練習は1回しかできなかったので緊張しました」とほっとした様子。

各団体ともコロナ禍で十分な活動ができず、苦労の跡も見えましたが、工夫を凝らして成果をアピールしていました。発表後の講評で、補助金審査委員の藤原萌実さんは「今日のような活動発表を地元の皆さんにたくさん見せてあげて下さい」と呼びかけました。

手作り紙芝居を使って民話を伝えるメンバー

NPO ステップアップ

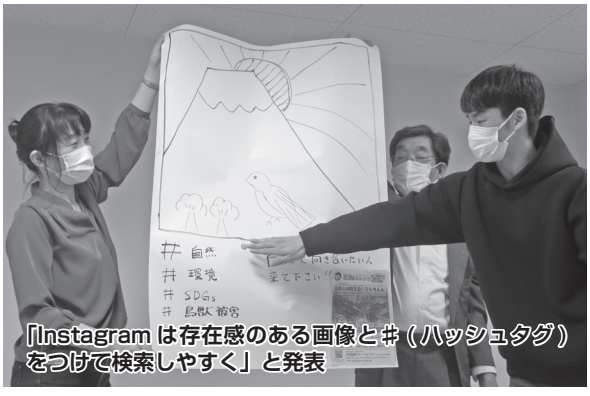
NPOステップアップ講座　ネットリテラシーのいろは
「SNS、うまく使えてますか？」

市民活動に活用できるFacebookやInstagramなどのSNS（ソーシャルネットワーキングサービス）。特徴や危険性を理解し、上手に活用するための講座を、5月29日ソフトバンク株式会社千野敬子さんと唐木快枝さんを講師に開催。10～70代、SNS初心者から慣れている人まで、幅広い参加者が集まりました。

はじめにSNSの利用状況や使う目的、特徴について意見交換。Facebookは若い世代が利用しておらず、Twitterは特に60代以上の利用率が低いなどといった傾向が明らかに。その後話題は投稿の「危険性」にうつります。講師の千野さんから「部屋で撮影する際に、制服などが映り込んでないか、屋外では場所が特定されやすい電信柱にも注意が必要」とアドバイスがありました。それを受け、参加者からは「日頃から新聞や本を含めてさまざまな媒体から情報をとり、視野を広く持つことで嘘の情報に惑わされず、自ら発信しないようにしたい」という意見がでました。

後半は、4つのSNSごとのグループに分かれて、イベントを広報するというワークショップ。どのグループもそれぞれの特性を活かし、工夫して発信していました。

60代の男性参加者は、「SNSの危険性や特徴を自分なりに理解したうえで、ツールとして活用していくことが大切と感じた」と話しました。



「Instagramは存在感のある画像と＃（ハッシュタグ）をつけて検索しやすく」と発表

#17 Myストーリー

NPO法人まめってぇ鬼無里
事務局長　吉田　廣子さん

吉田地区出身。独身時代は権堂の理髪店に勤め、結婚を機に鬼無里村の兼業農家の「嫁」となりました。

「鬼無里の暮らしはとても豊か。街とは180度違う。ここでは米もみそも切れることはないし、野菜もいつでも山のようにある。うどんも家で作るのが当たり前」と話す吉田さん。地域の生活改善グループの活動に関わった際に、先輩から言われた言葉が忘れられません。「この手でできないことは何もないんだよ」。自給自足の暮らしにワクワク・ドキドキの繰り返しだったそうです。

そして、2005年、鬼無里村が長野市に合併することになります。

市が合併地区での観光キャンペーンを企画、当時区長会副会長の吉田さんも「鬼無里イヤー」の実行委員に。同時に山岳フォーラムも開催されることになり、オーストリアのヴェルヘンヴェルグへ視察に。そこで、環境に配慮した街を目指す先進的な取り組みを知って心を動かされます。

鬼無里イヤー終了後、実行委員の中の4人と「再生エネルギーと食の自給を柱に、持続可能な取り組みを」とNPO法人を設立。「環境にやさしい移動手段による中山間地域の活性化」をテーマに、文部科学省の研究事業に申請します。鬼無里を訪れる人はマイカーかバス、地区内でのCO2削減を目指し、小水力やバイオマス、太陽光発電を試みながら電気バスをレンタルして実験をしました。

法人ではこれまで鬼無里の魅力を知ってもらい、共に課題解決する人材育成のためのイベント、間伐材を活用する薪活プロジェクトなど精力的に活動してきました。そして、今年からはさらにその先に進もうとしています。（特集記事参照）

吉田さんのモットーは「楽しくないことはやらない」です。どんなワクワク・ドキドキが鬼無里にあるのか。吉田さんに会いに行ってみませんか？

プロフィール
長野市吉田地区出身
夫と犬２匹と暮らし、趣味は畑の草とり

団体情報　NPO法人まめってぇ鬼無里
長野市鬼無里1657　TEL 026-219-3107
URL:https://mamettee.org

旬 まんまるの！NPO紹介

NPO法人 小田切エルダーフラワープロジェクト

同法人は2021年2月、小田切地区で設立。ハーブの一種エルダーフラワーの栽培・商品化による地域の活性化、持続可能な地域づくりを目指して活動しています。

ヨーロッパではどこにでもあるエルダーフラワーですが、日本で栽培している場所はほとんどないそうです。丈夫で育てやすく、虫もつきません。花はとてもかわいらしく、化粧品や食品などに加工でき、アレルギーにも効くと言われています。首都圏のレストランなどからも問い合わせが来るとのこと。

「小田切は小さな地区だが、〝わかち合い〟の心があって素晴らしい」と理事長の安西晋（すすむ）さん。地域おこし協力隊OBとして赴任して以来、地域に根を張り、仲間と共に活動しています。

エルダーフラワーの花
これを摘んで商品に加工

NPO法人小田切エルダーフラワープロジェクト
長野市大字小鍋114番地187
URL https://elderflowerotagiri.amebaownd.com/
e-mail otagiri2021@gmail.com

お宝ザクザク 地域を掘りおこせ!

篠ノ井&大豆島

NAOTOMIクリーン花壇をつくろう!

直富商事株式会社

産業廃棄物処理や資源物回収業の直富商事株式会社は、地域や社会とつながる取り組みとして、環境美化などの社会貢献活動に力を入れています。その一つとして、同社秋古工場前の国有地の花壇を管理。今年度は初めて若者の地域活動体験プログラム「地域まるごとキャンパス」に参加し、学生の受け入れをしています。

5月8日土曜日、緑化や美化活動に興味をもつ学生6人が参加し、花壇のデザインを決める1回目のミーティングがありました。まずはコンプライアンス室主任の小川和美さんからこの活動についての事前説明。その後実際に花壇を見てデザイン案を作成しました。

花壇のデザインは初めてという学生たちでしたが、徐々に活発な意見が飛び交うようになりました。「ハートの形にしたい」「花の高さを段々に」など学生らしい視点でデザインが決定。学生からは「協力して作ることが楽しく、デザインだけではなく企業が取り組む社会貢献活動の勉強になった」という声もあり、「学生と活動できてよかった」と小川さん。

花が植えられるのは6月下旬。篠ノ井国道19号沿い秋古工場前の花壇をみんなで見に行きましょう!

話し合いながら、花壇のデザインを書き込んでます

コロナ禍でもできることがある

大豆島地区住民自治協議会

5月7日、大豆島地区住民自治協議会が開催する子育てサロンに、乳幼児親子10組が参加しました。子どもたちが滑り台やかけっこなどで遊ぶかたわら、母親同士楽しそうに話す姿も多く見られました。参加者は「遊ぶ場所が限られてしまい、窮屈な思いが続いていた。存分に遊ぶことができて子どもも楽しそう」と話しました。

同サロンは毎月3回児童センターを借りて開催してきましたが、コロナ禍で一時中止。その後消毒の徹底や密を避け参加人数を限定する、おもちゃの数を減らすなどの対策をし、2020年9月から隣接する大豆島公民館で月1回の開催にこぎつけました。

主任児童委員の小林厚子さんは、「お母さんたちの情報交換の場としてとても必要とされており、開催を待ち望む声が多かった。たくさん遊んで交流を楽しんでほしい」と再開を喜びました。

地域福祉ワーカーの平野歌織さんは、「ただ中止するのではなく、どうしたらできるのかと話し合いを重ねた。多くの親子に楽しんでもらうために、今後も地域一体で協力し合いたい」と話します。コロナ禍でも前向きに取り組もうとする姿勢が印象的でした。

絵本をひっくり返し、大人も一緒に遊びます

まんまる 市民協働サポートセンター スケジュール 2021年 7月▶ 9月

タイトル	日　時	会場 / 費用	内　容
NPO 初歩講座	9 月 29 日㈬ 18:30~20:30	市民協働サポートセンター 参加費：300円 定員：5人	「何かしてみたいな」と考えている人、ボランティアとは? NPO ってなに?という人など、まずこの講座から始めましょう。 市民活動や NPO の言葉の意味から市内の市民活動紹介も。
ＮＰＯステップアップ講座 「レッツトライ！助成金」	9 月 5 日㈰ 13:30~16:00	もんぜんぷら座 304会議室 参加費：　500円 定員：　20人	団体運営に欠かせない助成金。 助成金の基礎から最近の制度のトレンドまでわかりやすく説明します。 伝わりやすい申請書の作り方・書き方を、 ワークをしながら学べる講座です。 助成金活用が初めての方も歓迎です。 講師:粟津知佳子さん（元助成金財団プログラムオフィサー） 対象：NPO、 地域活動に取り組んでいる個人や団体等
ＮＰＯステップアップ講座 「コミュニティマネジメント講座」	9 月 23 日㈷㈭ 13:00~16:00	もんぜんぷら座304会議室 またはオンライン（zoom） 参加費：500円（学生無料） 定員：もんぜんぷら座 25人 オンライン受講50人	「猫でもわかるチームビルディング」と題して、 仲間づくりの第一歩の踏み出し方、 持続可能なコミュニティづくりを学びます。 実際に運営、 またはこれから活動を予定している仲間（3 名以上）と参加し、 アクションプラン作成、 ワークショップを交えながらコミュニティ運営の実践につなげます。 講師:呉 哲煥さん（NPO 法人CRファクトリー代表理事） 対象：学生団体・NPO・地域活動に取り組んでいる、 またはこれから立ち上げを予定している方
SDGs 集中講座	8 月 7 日㈯ ① 13:30~15:00 ② 16:30~18:00 8 月 11 日㈬ ③ 13:30~15:00 ④ 16:30~18:00	オンライン（zoom） 参加費：無料 定員：各20人	SDGsについて、4つのテーマごとに集中講座を開催します。 【テーマ】国際理解（多文化共生）、ジェンダーレスとは、環境（ゼロカーボンに向けて）、 教育（10 代と考えるいまの教育） それぞれ講師をお招きし、 前半は講演を、 後半はワークショップを行います。
地域まんまる in 鬼無里 「鬼無里で暮らし続けるために ～交通編～」	7 月 25 日㈰ 13:30~16:00	鬼無里地区活性化センター 参加費：無料 定員：50人	持続可能な地域を考えるうえで、 地域交通は欠かせないものです。 特に中山間地では公共交通の衰退が課題となっています。 今回は鬼無里地区で開催。 地域交通をテーマに鬼無里地区で暮らし続けるためのアイデアを地区内外の参加者全員で考えます。 対象：行政、 住民自治協議会やNPO関係者、 地域交通に関心のある人など オプション企画：同日 10:00 ～ 12:00「地域循環共生圏コーディネーター育節講座」の 1 回目＜SDGs と地域交通＞を同会場にて試聴できます。
まちむら交流会 in 七二会 七二会「竹取物語」 ～竹を割ったら 何が生まれる？～	9 月 4 日㈯ 10:00~12:00	集合場所：七二会コミュニティセンター 参加費：保険料実費(予定) 定員：家族単位の申し込みで、合計20人程度	今回は、七二会の竹を使った「ものづくり体験」です。 さて、 何ができるか親子で挑戦してみましょう。 竹の水鉄砲大会もあるかも。 また市内の学生有志が作った七二会紙芝居も見られます。 企画団体：七二会いいとこ発見委員会
まんまるボランティアサロン ①ボランティアさん集まれ！ ②機関誌発送サロン	①毎月第 4 火曜日 11:00~14:00 ②9 月 28 日㈫ 10:00~14:00	市民協働サポートセンター 参加費：無料 対象：誰でも	まんまる開催のボランティアサロンです。 ①封筒や紙バックを、 カレンダーや新聞紙で作ります。 ボランティアに興味のある方、 ぜひどうぞ! ②３ヶ月に１回発行するセンターの機関誌を発送する作業です。 封筒にラベルを貼ったり、 機関誌を封筒に入れたり。 ちょこっとボランティア、 していきませんか?

新型コロナウイルスの影響で、開催方法などが変更になる可能性があります。ホームページやフェイスブックでも随時情報発信しています。あわせてご確認ください。

まんまる はココに! 信州地域デザインセンター

信州地域デザインセンター（UDC信州）は、中央通り、北野文芸座の向かい側、土蔵造りの老舗を改装した建物の二階にあります。地域の特色を活かしたまちづくりを目指し、長野県とUR都市機構、まちなみカントリープレス、東京大学と信州大学といった公・民・学が連携して、2019年にオープン。コーディネーターの倉根明徳さんは「地域のこんなまちづくりをやりたい！という思いを叶えるため、各分野が得意を活かしてサポートをしているところです」と話します。おしゃれな部屋には、まちづくりに関する書籍や資料がたくさん。入り口にのれんがかかっていれば”営業中”なので、興味のある方は立ち寄ってみてはいかがでしょうか。
信州地域デザインセンター（長野市東後町16-1 2階　026-405-4861）

コーディネーターの倉根明徳さん（右）と西沢和生さん（左）

発行 / **市民協働サポートセンター まんまる（長野市）**
TEL:026-223-0051　FAX:026-223-0052
〒380-0835 長野市新田町 1485-1 もんぜんぷら座 3F
e-mail：npo@nagano-shimin.net
ホームページ：https://nagano-shimin.net/

編集後記

日記代わりに「毎日Facebookに投稿」を心がけ、デジタルでない日記帳も書き続けてもう20年以上。振り返ることはほとんどないのですが、Facebookの「過去のこの日」は、自分を戒めるのに良い機能だと思うこのごろ。（かずぽん）